

& Shepard Books より出版、イラストは Joel Schick。

- (3) *Wayside School Gets a Little Stranger* は Morrow Junior Books より1995年に出版、イラストは Joel Schick。

この学校については、好き嫌いが分かれるかもしれませんが、ルイスという著者と同じファーストネームの「校庭係の教師」も登場します。このルイスからは、子どもたちへの暖かい眼差しがしっかり感じられます。

- 2 Avon Books より1981年に出版
 3 このカスタマー・レビューは以下に載っていました。
http://www.amazon.co.jp/gp/product/0380834510/ref=oss_product
 4 Random House より2000年に出版。イラストは Amy Wummer。
 5 Delacorte Press より2006年に出版。
 6 Knopf より1991年に出版。
 7 このシリーズは現在のところ8冊が出版されています。主人公の名前は Marvin Redpost。1冊ずつ話は完結します。このシリーズでは、私は3冊目 *Is He a Girl?* (Random House より1993年に出版、イラストは Barbara Sullivan) と6冊目 *Class President* (Random House より1999年に出版、イラストは Amy Wummer) がかなり好きです。
 8 Dell Laurel-Leaf Books より2001年に出版。
 9 2004年にブエナ・ビスタ・ホーム・エンターテイメントより「穴/Holes」というDVDが発売。
 10 Avon Books より1983年に出版。イラストは Barbara Samuels。
 11 Knopf より1987年に出版。
 12 Delacorte Press より2010年に出版。

白い雪と黄色い雲

経営学部
 矢田 博士

木末北山煙冉冉
 木末 北山 煙は冉冉たり
 草根南澗水泠泠
 草根 南澗 水は泠泠たり

繰成白雪桑重緑

白雪を繰り成せば 桑は重ねて緑に

割尽黄雲稲正青

黄雲を割り尽くせば 稲は正に青し

北宋・王安石の「木末」と題する七言絶句である。王安石は、神宗の時に宰相に抜擢され、「新法」と呼ばれる急進的な政治改革を敢行したことで知られるが、晩年は政治の一線から退き、江寧（江蘇省南京市）に隠居した。江寧府城の北の郊外には鍾山という名の山が横たわる。本詩は、江寧隠居後の作で、鍾山の麓の初夏の田園風景を描く。「冉冉」は、徐々に移りゆくさま。「泠泠」は、水が清らかなさま。

—《北に目をやると、山を包み込んでいた霧がしだいに薄れゆき、木々の梢が姿を現しはじめた。南に目をやると、谷川の兩岸に草が生い茂り、その草の根のあたりを清らかな水がさらさらと流れている。「白い雪」を紡ぎおえたかと思えば、桑は再び緑の葉を茂らせ、「黄色い雲」を刈り尽したかと思えば、稲はまさに青々とその葉を伸ばす。》—

後半二句に見える「白雪」と「黄雲」を、ここではあえて文字通り「白い雪」と「黄色い雲」と訳したが、「繰」「割」という動詞が用いられていることから、それぞれ「白い繭から紡ぎ出される生糸」と「黄金色に穂を实らせた一面の麦畑」の比喩であることが察せられよう。⁽¹⁾ 農家の女は、繭から生糸を紡ぐ作業を終えたかと思えば、引き続き蚕を育てるための桑摘みの作業に移る。一方、農家の男は、麦の収穫を終えたかと思えば、秋の収穫に向けて稲の成長を見守る。後半の二句は、このような初夏の一連の農事を詠ったもので、「白い繭から紡ぎ出される生糸」に「緑に茂る桑の葉」、「黄金色に実った麦の穂」に「青々と伸びる稲の葉」と、初夏の田園の風景が、あたかも一幅の絵を見ているかのように、色鮮やかに目に浮かぶであろう。ちなみに、穀物は一般に、秋に実りの季節を迎えるが、麦は旧暦の初夏四月に穂を实らせる。よって、旧暦の四月（新暦では五月）頃を、「麦にとっての実りの秋」という意味で、「麦秋」と呼ぶ。

ところで、本詩の後半二句に見える「白雪」「黄雲」の比喩表現は、後世の詩評家の注目するところ

ろとなった。ただし、その評価については賛否が分かれるようである。まず、南宋・恵洪は『冷齋夜話』巻五の中で、以下のように言う。

荆公用其意、作古今不經人道語。荆公詩曰、「木末北山煙冉冉、……、割尽黄雲稻正青」。
〔荆公 其の意を用うるに、古今 人の道うを経ざるの語を作る。荆公の詩に曰わく、「木末 北山 煙は冉冉たり、……、黄雲を割り尽くせば 稲は正に青し」と。〕

恵洪はまず初めに、「王安石（荆国公に封ぜられたので荆公と呼ばれる）は、その言わんとしていることを表現するにあたり、古より今に至るまで、誰もが言ったことのない語を作り出した。」と、王安石の表現の独創性を高く評価したうえで、さらにその具体例として本詩を挙げる。

恵洪はまた、同じく『冷齋夜話』巻四の中で、以下のように言う。

用事琢句、妙在言其用、不言其名耳。此法唯荆公・東坡・山谷三老知之。荆公曰、「含風鳴緑鱗鱗起、弄日驚黄裊裊垂」。此言水柳之用、而不言水柳之名也。東坡「答子由」詩曰、「……」。山谷曰、「……」。〔用事琢句、妙は其の用を言うも、其の名を言わざるに在るのみ。此の法 唯だ荆公・東坡・山谷の三老のみ之れを知る。荆公曰わく、「風を含み鳴のごとく緑にして 鱗鱗として起こり、日を弄び驚のごとく黄にして 裊裊として垂る」と。此れ水と柳の用を言うも、水と柳の名を言わざるなり。東坡の「子由に答う」詩に曰わく、「……」と。山谷曰わく、「……」と。〕

恵洪はここでもまず初めに、「詩に故事を用いたり、詩句を磨きあげたりする場合、その神業にも近い巧みさは、その事物の表に現れた特質を言っても、その事物の名を言わない、という点にある。ただ荆公（王安石）・東坡（蘇軾のこと。東坡はその号）・山谷（黄庭堅のこと。山谷はその号）の三人だけがその方法を理解している。」と、王安石と蘇軾と黄庭堅の詩人としての優れた点を評したうえで、その具体例として、それぞれ三人の詩句を挙げる。

恵洪は、ここでは王安石の例として本詩の当該

の二句とは異なる詩句を挙げているが、それに対して南宋・胡仔は『若溪漁隱叢話前集』巻三十六の中で、上記の恵洪の説をほぼそのまま引用したうえで、恵洪の説を補足するかのよう、以下のように言う。

若溪漁隱曰、荆公詩云、「縑成白雪桑重緑、割尽黄雲稻正青」。白雪則糸、黄雲則麦、亦不言其名也。

〔若溪漁隱曰わく、荆公の詩に、「白雪を繰り成せば 桑は重ねて緑に、黄雲を割り尽くせば 稲は正に青し」と云う。白雪は則ち糸なり、黄雲は則ち麦なり、亦た其の名を言わざるなり。〕

つまり胡仔は、王安石の当該の二句もまた、「事物の名を言わずして、その事物の表に現れた特質を言う」という「琢句」における「妙」の一例であると指摘するのである。

このように、王安石の詩に見える「白雪」「黄雲」の比喩表現を高く評価する者がいる一方で、王安石のこの比喩表現に対して、いささか難色を示す者もいたようである。南宋・孫奕がその人で、『履齋示兒編』巻十「詩説・白雪黄雲」に、以下のよう言う。

詩人喜荆公「縑成白雪桑重緑、割尽黄雲稻正青」之句、莫不極口称誦。而不知其有斧鑿痕。竊謂雪不成縑、雲不可割。請易縑為捲、易割為収、則糸麦自見。

〔詩人 荆公の「白雪を繰り成せば 桑は重ねて緑に、黄雲を割り尽くせば 稲は正に青し」の句を喜び、口を極めて称誦せざる莫し。而れども其の斧鑿の痕有るを知らざるなり。竊かに謂えらく、雪は縑を成さず、雲は割るべからずと。請うらくは、「縑る」を易えて「捲く」と為し、「割る」を易えて「収む」と為さんことを、則ち糸と麦と自ずから見るるなり。〕

この記述によれば、当時の詩人のなかにも、王安石の当該の二句をたいそう気に入る、常々それを絶賛していた者がいたようである。しかし孫奕は、王安石の当該の二句には「斧鑿の痕（句作りにおける工夫の痕跡）」が見え見えであることを知らないのだと、その詩人を批判する。おそらく

孫奕は、「糸」「麦」をすぐさま連想させる「繰」「割」という動詞が用いられていることに不満を抱き、それを「斧鑿の痕」と称したのであろう。そこで孫奕は、「繰」「割」という動詞を、それぞれ「捲」「収」という動詞に換えることを提案する。おそらく孫奕は、以下のように考えたのであろう。——熟語として成り立ちがたい「繰雪（雪を繰る）」「割雲（雲を割る）」という表現を、熟語としてすでに定着している「捲雪（雪を捲く）」「収雲（雲を収む）」という表現に換えたならば、「雪は繰るを成さず、雲は割るべからず」という問題も解消されるばかりか、「斧鑿の痕」を消すこともできる。そしてさらに「捲成白雪」「収尽黄雲」と改めたとしても、「捲糸（糸を捲く）」「収麦（麦を収む）」への連想も十分に可能であることから、「白雪」「黄雲」がそれぞれ「糸」「麦」を比喩していることは、自ずと分かる。——と。

「雪は紡ぐことができないし、雲は刈ることができない」という孫奕の理屈は、確かにその通りではあるが、かといって「捲雪（雪を捲く）」「収雲（雲を収む）」のように換えてしまっただけでは、表現としてはあまりにもありきたりで、かえって面白みに欠けてしまうのではないだろうか。本来であれば結びつきにくい「繰」と「雪」、「割」と「雲」とを結びつけたところにも、王安石の当該の二句の面白さを見て取ることができるように思われるのである。あえて言えば、王安石の当該の二句のなかでは、「雪も紡ぐことができるし、雲も刈ることができる」のである。その意味では、筆者は「人の道（みち）を経（た）ざるの語（ことば）を作る」と評した恵洪（けいこう）の説に与（ま）りたい。

また絶句の一字目は、平仄の制約が必ずしも厳しくない箇所ではあるが、孫奕の修正案—「捲成白雪桑重緑、収尽黄雲稻正青」—よりも、王安石のものと詩句—「繰成白雪桑重緑、割尽黄雲稻正青」—の方が平仄面でのバランスもよいようである。

以上、人の評価は様々であるが、王安石自身はいえ、当該の二句をたいそう気に入っていたらしく、「壬戌五月与和叔同遊齊安〔壬戌五月、和叔（とも）と共に齊安に遊ぶ〕」と題する七言絶句の中でも、そっくりそのままそれを用いている。「壬戌五月」とは、すなわち神宗の元豊五年（一〇八二）五月のこと。江寧府の知事の任にあった陳繹（あざな）（字

は和叔）とともに江寧府城の東の門外にあった齊安院という寺院に出かけた折りの作で、時に王安石は六十二歳であった。「木末」詩とどちらが先に作られたのかは不明であるが、ほぼ同時期の作であろう。最後にその詩を紹介して筆を擱くこととする。

繰成白雪桑重緑

白雪を繰り成せば 桑は重ねて緑に

割尽黄雲稻正青

黄雲を割り尽くせば 稲は正に青し

它日玉堂揮翰手

它日 玉堂 翰を揮うの手

芳時同此賦林垌

芳時 同に此くのごとく 林垌を賦さん

《『白い雪』を紡ぎおえたかと思えば、桑は再び緑の葉を茂らせ、「黄色い雲」を刈り尽くしたかと思えば、稲はまさに青々とその葉を伸ばす。いつかまた、この寺のお堂で筆を揮って、春のよき時節に共にこうして郊外の風景を詩に詠おう。》

【注】

- (1) 一面に広がる麦畑、初夏に黄金色に実った麦の穂が風になびくさまを目にすると、確かに黄色い雲の上にももいるかのように感じられる。この近辺では、五月の初旬から中旬にかけて、東海道新幹線の三河安城駅の周辺、あるいは名鉄名古屋本線で豊橋に向かう途中、新安城駅を通過したあたりで、このような景色を車窓から目にすることができる。
- (2) 王安石の「南浦」と題する七言絶句の後半の二句である。「鴨緑」とは、鴨の頭が碧緑色であること。ここでは碧緑色に澄んだ水を比喩する。「鶯黄」とは、鶯鳥の雛の羽毛が淡い黄色であること。ここではまだ緑が濃くなる前の春先の、淡い黄色の柳の枝葉を比喩する。「裊裊」は、しなやかなさま。二句の大意は以下の通り。—《風を受けて、鴨の頭の色にも似た碧緑色の水面に、鱗状にさざ波がたち、日の光を浴びて、鶯鳥の雛の柔らかな羽毛の色にも似た淡い黄色の柳の枝がしなやかに垂れる。》—
- (3) 王安石は句を作るにあたり苦心に苦心を重ねたと言われる。例えば、その七言絶句「泊船瓜

州〔船を瓜州に泊す〕詩の転句—「春風又緑江南岸〔春風 又た江南の岸を緑にす〕—については、草稿段階では「春風又到江南岸〔春風 又た江南の岸に到る〕」としていた。しかし「到」字が気に入らず、「過」字に改めた。しかしそれも気に入らず、「入」字に改め、さらには「満」字に改めるなど、推敲に推敲を重ねること十数字にして、ようやく「緑」字に決めたと言う（南宋・洪邁『容齋続筆』第八）。このように句作りに相当のこだわりを見せた王安石が「緑成白雪桑重緑、割尽黄雲稻正青」の二句については、異なる二首の詩のなかで繰り返し用いているところから見て、彼自身この二句の出来映えについては納得していたものと思われる。

拆哪儿？—最新中国語おもしろ探訪

現代中国学部
薛 鳴

教学の一環として、わが学部では2年生全員を中国南開大学に留学させ、中国語と中国文化を勉強させる現地プログラム—「現プロ」を実施している。その引率で今年度の春学期を天津で過ごした。

事情あって二週間遅れの現地入りは、ちょうど世界を震撼させた「3・11」大震災発生の直後だった。不安から母国へ、外国へと脱出しようとする人々で賑わう空港の出発ロビー。期せずにして、地震と原発の影響下にある日本を離れることになる自分がいるとは、なんとも不思議に思えた。

中国に来ると、まず耳にしたのは“抢盐”——塩の買いだめである。日本の海が放射能で汚染され、海水からできる塩化ナトリウムの結晶である塩も「核」に汚染されるとなると、日本海から来

る潮が塩になるからと、一夜にして、塩の値段が何倍も跳ね上がり、人々は塩の買いだめに奔走する。携帯のチェーンメールに“大核民族、盐荒子孙”というのが広く流伝し、ユーモアに皮肉も込められ、人々の口から口へと伝えられるに至った。いうまでもなく、“大和民族、炎黄子孙”をもじったものである。“核”と“和”は同じ“hé”と発音し、大和民族が一瞬にして「核」を帯びる民族になり、“盐荒”と“炎黄”は、声調がやや違うが同じ“yan huang”という発音から、“炎帝”と“黄帝”の子孫である“炎黄子孙”と誇りを持って自称する中華民族の子孫が塩不足にオロオロしていることになる。もちろん、事はそれほど短絡的なものでないことが判られ、その騒ぎもほどなく収まった。その後の原発への反省に、“核去何从”（“何去何从”をもじったもの。“核”と“何”は共に“hé”と発音する）といったような文言が新聞の紙面に躍り、我々は一体いずれを去り、いずれに従うか、身の処し方に疑問を投げ付けられる。

このような同音異義語を利用するものは“谐音”と言って、広く中国語のレトリックな表現に用いられている。古くから“歇后语”に使われるものに、“孔夫子搬家——净输（书）”のようなものがある。「負けてばかりいる」と言うために、「孔子の引っ越し——本ばかり」を持ちだして、“书”（shū）と“输”（shū）の“谐音”を利用して、ワンクッションを置いて面白おかしく表現する効果をもたらす。ほかに“外甥点灯笼——照旧（舅）”（依然として変わらない様を表す。“旧”と“舅”は発音が同じ“jiù”である）のようなものよく知られている。

一方、携帯電話やインターネットの普及によって、情報伝達のツールも多様化しているなか、中国では携帯電子メール（“短信”）に数多くのチェーンメールが回っている。数々の風刺やユーモアが、その“短信”に乗って人から人へと伝わっている。冒頭の例もそうだが、新年の挨拶に次のようなチェーンメールが回る。

祝你在新的年里，“钱”程似锦，“富”如东海，“瘦”比南山，“性”福美满，“薪”春快乐！

本来の“前程似锦，福如东海，寿比南山，幸福美满，新春快乐”が、一文字をすり替えただけで、現代人の欲望を巧みに表している。

“钱” = “前” qián; “富” fù = “福” fú; “瘦” =